

---

# 眼（まなこ）

S e y   R a i n

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
まなご  
眼

【Nコード】  
N3337D

【作者名】  
S e y R a i n

【あらすじ】  
男は顔にコンプレックスを持っていた。ある日鏡を見ると、そこにはあるはずの顔が映っていなかった。男は会社に出社しなければならぬが……

ここにある男がいた。その男は、毎朝起きてから顔を洗うのが憂鬱でならなかった。それは、いやでも鏡を見ない訳にはいかないからである。

彼は自分の顔に酷くコンプレックスを持っていた。中心から大分離れているうえにつり上がった眼がその原因だった。

その為に子供の頃から友達からもからかわれたりもしたし、大人となった今でも道ですれ違う人々の顔つきが一瞬変わる気がするのだ。それが自分に向けられたものであると思うと耐え難くなった。

顔を洗い終わると、眼鏡を手に取り顔に掛けた。すると一層に自分の顔がはつきりと見える。この眼鏡も市販されているフレームでは焦点が合わないので、特別注文した代物であった。

「どうして、こんな顔に生まれたのか……」

そう呟くと深く溜息をつくのが毎日の日課のようになっていた。

そうして、憂鬱な気持ちのまま、会社に行く準備に取り掛かるのだった。本音は誰とも顔を合わせたくないが、生活して行く為には働かなくてはならない。家を出ると視線を下に落とした格好で駅へ道のりを急いだ。少しでも人と視線を合わせたく無いという心理がそうさせたのだ。

だが、俯いて歩けば背筋も曲がり、逆にすれ違う人々には不自然に映り、かえって浴びなくても良い視線を向けられていることに男は気付かずにはいた。

ある日の夜のことだった。

「もうこんな日々はうんざりだ。いつそ目が見えなければ、人の視線を気にすることも無くなるのに……」

男は、自分の眼を手で確認するように触りながら呟き、涙を流した。そして布団を頭から被って寝てしまった。

次の日の朝、男はまた憂鬱な気持ちで目覚め、いつものように顔

を洗いに行った。無造作に顔を洗い、ふと鏡を見ようとして驚いた。なんと、そこに自分が写っていなかったのである。何度も鏡を覗き込むが、自分は見えずに後ろの壁が写っているだけだった。

暫し茫然<sup>しほぼうぜん</sup>としていた男だったが、出社する時間であることを告げる腕時計のアラームが鳴り、我に返った。とりあえず、会社に行かなくてはと思い急いで身支度を済ませ、家を飛び出た。

周りの風景や人は自分から見ることができた。だが、自分が他の人に見えているのかと、不安に駆られた男の行動はいつもとは違っていた。普段ならなるべく他人と眼が合わないようにと俯<sup>うつむ</sup>いているのだが、この日はまるで自分の存在を他人気づいて欲しげに、周囲をキョロキョロと見まわしていた。自分に気づけば、きつと怪訝<sup>けげん</sup>な表情が好奇心な視線を向けるに違いないと思つてのことだ。

だが、周囲の人たちは別に自分に対し、怪訝<sup>けげん</sup>な表情も好奇心な視線を投げかける者はいない。男は益々不安になった。

会社に到着し、自分の席に着いた時、一人の同僚が近づいてきた。男の心境は、存在に気付いてもらえないのでは、という不安が最大限に達した。

その時、同僚がポンと肩を叩くと

「どうしたんだ、今日はいつもと違って真つすぐと前を見て、随分と堂々としているな。いつもの自信のなさそうな君とは別人のようだよ」

そう言われて男は、他人から自分が見えていることを知って安心した。そして、しばらく考え込んだ後、こう思った。

《他人から見られることが怖かった自分が、見えなくなったら思っただけで、こんなに不安になるとは……。それに、見えていたということは、自分が思っていたよりもずっと人は俺のことを特別に偏見<sup>へんけん</sup>の眼で見ていたわけではなかったのだ》

「どうしたんだ？」

黙り込んでいる男を心配した同僚が聞き返すと、

「なんでもないよ」

そう言つて男は、同僚の眼を見て答えた。もう、以前のように視線を逸<sup>そ</sup>らすことなく。

男は休み時間にトイレに行き、鏡を覗いて見ると、そこには、いつもの自分の顔があつた。朝、鏡を覗<sup>のぞ</sup>いたときに自分が映らなかつたのは、きつと頭を垂れ、上目使いで見たために自分が鏡に入らなかつたからなのかもしれない。

男にとって、そんなことはもうどうでも良いほど小さなことのよう<sup>う</sup>に思えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3337d/>

---

眼（まなこ）

2010年10月10日01時37分発行